

94 「生涯教育学 (学会)」は、いかにしたら可能 (存在意義をアピール出来る) か?

堂本 彰夫

(1) 改めて、地方で開催された「日本生涯教育学会」！まずは、すごい時代が到来しているものである！

少し話は飛ぶが、過日 (11月27~28日)、今、私が、現在唯一所属している「日本生涯教育学会」が、宮城県仙台市 (会場：東北学院大学) で行われた！実は、この学会大会は、昨年、同地で行われる予定であったが、件のコロナ禍により中止となり、今年度、改めて仕切り直しという形で、実施されたわけである！残念ながら、私は、現地参加しなかったが (オンライン併用の開催ということで、それに甘んじさせていただいた!)、評議員会を含め、パソコン上から、会員 (あまり熱心ではない?) としての最低限の務めを果たさせてもらった！

それにしても、今更ながら、とんでもない時代が到来しているものである！オンラインだけのものであれば、現在、自分自身が、その真似事 (ズーム会議→教育協働セミナー) もやっているのだから、あまり驚くことはないが、一方で、通常の現地開催を行いながらのそれであったわけなので (「ハイブリッド開催」ということである?)、運営する人達の大変さ (映像・音声等の共有・配信等の操作も含めて!) が、つくづく思い遣られた次第である！本当にご苦労様でした！そして、ありがとうございます！そういうことである (恥ずかしながら、当日の閉会時に、チャットで、そのことを送信した！自分でも、びっくりである！やれば、出来る?)！

ちなみに、今回は、折角準備していた昨年度、その開催が出来なかったということで、リベンジの思いを込めてのものであったろうが、地元の人達 (学会員ではない多くの人達) の、運営参加・協力はもちろんのこと (大会前日の「エクスカージョン」→震災遺構仙台市立荒浜小学校/せんだい 3.11 メモリアル交流館への訪問を含む)、学会発表参加 (展示発表を含めて) には、大いに驚かされるとともに、感銘を受けるものでもあった (本心からそう思う！ただし、私自身は、それらを、具には見ていないので、これ以上は、何とも言えない? 否、言うてはいけない!)！

ということで、かの「東日本大震災」が、このような動き、そして、多くの人達の連携・協力の輪を創り出してきたということであろうが、これも偏に、前会長を初め、当該地区の理事のみなさん方の尽力 (多分人徳も?) の賜物ということでもあろう?! ただし、本学会大会が、期せずして、このように (地方で、否、宮城県仙台市で!) 歓迎され、この地区の人々の取り組み、思いのある人達の団結力、ネットワークによって開催されたことには、本当に頭の下がる思いなのであるが (実際に現地を訪れておれば、この感動もさらに増したであろう?)、一方では (当地の人には失礼かもしれないが?)、こういう人の輪、ネットワーク力に、ある意味羨ましさ? を感じる自分でもある (過去の自分と比べる、浅はかな私ではあるが?)！

今後、本学会の学会大会が、地方で行われるのかどうかは分からないが (取り敢えずは、来年は、通常のように、東京上野の社会教育実践研究センターで行われるとのこと!)、こうした開催が実現できるのであれば、そして、かの「オンライン併用 (ハイブリッド方式)」の開催が継続されるのであれば、多くの地域への浸透 (刺激?) も図れて、もの凄く意義深いものとなることは、間違いないであろう?! 是非そうなって欲しいものであるが、やはり実際には、各地区理事等の負担/責任は計り知れなく重く、なかなか実現は困難かもしれない (過去何回かはそういう時もあったが、最近では、ほとんどなかった! 原則として、2年に一度というようなことも聞いてはいるが?)?! 果たして、どうなっていくのやら?

(2) とは言え、「生涯教育学会」は何をウリ? とするのか? そこで見出され、共有すべきものは、一体何か?!

さて、以上のことはともかく (まったく別次元のことである!)、これまで何度も告白? しているように、その学会からの引き際を考えている私にとっては (年齢的にもそうであるが、ただそれだけではない!)、もう一つ、ここで書き留めておきたいことがある! それが、上記標題の、『生涯教育学 (学会)』は、いかにしたら可能 (存在意義をアピール出来る) か?、言い換えれば、そこには、本学会としての独自の「アイデンティティ」 (存在意義/ウリ?) があってしかるべきなのではないかということであるが、そのことに対する、私なりの答? が、今回見えてきたようにも思えるのである?! 単なる自己納得 (我執?) かもしれないが、それが、本学会の存在意義 (ウリ?) に、大いにつながるのではないかということである (どこで、どのように開催されるかは、また別の問題だということでもある?)?!

すなわち、このことについては、前々日に行われた「評議員会」にて、本学会の名称に関わって、つまり「生涯教育 (学)」について、上記のような、長年の思い? を述べたのであるが、他の人達にとっては、あまりインパクトがなかったようにも思えるが (直接の発言がなかったということであるが?)、要は、今のような多種多様な (悪く言えば、種々雑多な) 研究、事例発表 (研究) でよいのではないかということであり (貴重な人物/組織や情報に出会える!)、たとえそうではあったとしても、見方によっては、そこに、かの「生涯教育学 (学会)」の意義や可能性も見出せるのではないかということである (もちろん、現在でも、多くの人が、本学会の意義や可能性を感じていることは言うまでもない! 特に、今回のそれが、大いに実証もしている?)! ?!

そこで、ここで、このことについて、多少反芻・事後拡大してみると、まずは、私の思いは、「生涯学習 (学)」

でもなく、「社会教育(学)」でもない！はたまた、「生涯学習・社会教育(学)」というような曖昧な位置づけ(ある意味仕方がないが！)でもない！まさに、「生涯教育(学)」のそれを、どのように位置づけ、外に対して、どのように、それを説明(アピール?)すればよいかということである(今の私からすれば、それは、「生涯学習(学)」「社会教育(学)」「生涯学習・社会教育(学)」からの「生涯教育(学)」への雄飛(回帰?)ということである?!)！

しかも、それは、従来の「生涯学習(学)」「社会教育(学)」、あるいは「生涯学習・社会教育(学)」のためではなく、まさしく、「学校教育(学)」も含めた、言わば「教育全体(学)」のためなのである！余談?ではあるが、それが、かのポール・ラングランが提唱した「生涯教育(学習)」(lifelong integrated 生涯に亘って統合された education(learning))の理念であり、目標でもあった(→「タテの統合」「ヨコの統合」?!すなわち、そこでの鍵概念は、「統合 integration」ということであり、それに基づく取り組み(しくみづくり等)、研究の基軸が、まさに「生涯教育(学習)」ということになるのである(余計なこと?だが、「教育全体」を視野に入れる、あるいは研究の対象にすると言っても、その中の「一つのスタンス」であり、その限りにおいて、「一つの研究分野」だということになるのである！鳥澁がましい?が、「教育学(全般)」に置き換わるものではないということでもある!)！

(3) 具体的には、「生涯教育学(学会)」として、どのようなスタンス、研究テーマが求められるのか?!

では、そうであるならば、具体的には、「生涯教育学(学会)」として、どのようなスタンス、どのような研究分野(テーマ)が求められるのか?!そこが、改めて問われるし、その内実が伴わなければ、全くの空理空論ともなり、多くの賛同者も得られない?!なお、これについては、既知のように、実際には、そこにおける「統合 integration」のイメージがうまく描けず(「生涯学習体系への移行」ということは言われたが!)、その具体的な姿・形(制度化の実体?)は、各国・各地域によって異なり(それぞれの実情による!)、その全体像(理想像?)は、今でも、ほぼ理念の段階に留まっている(我が国では、まがりなりにも、2006/平成18年の改正によって、教育基本法の第3条に、その規定(「生涯学習の理念」)が盛り込まれたが、まだまだそれは、理念だけの状態にあると言ってよい!)?!

それだけ高邁な(実際には手間暇かかる?)理念であり、その具現化にあたっては、関係者・関係機関間等の抜本的な調整(合意)が必要であり、まさに数多の困難が横たわっているということであるが、極端に言えば、教育全体の、ある種の「相転移」が必要であるということでもある?!しかし、だからと言って、このまま見過ごしていいわけでは、決してない！否、逆に、かなりの年数・経験を経てきたわけであるので、それを踏まえた、一定の姿・形(答?)は提示されてもよい！そういうことでもある?!

ただし、もちろん、その「生涯教育(学習)」の理念が、今でも有効であるということが前提ではある！しかしながら、それについては、まさしく今(否、今だからこそ?)、その理念が要請されているということも出来る！例えば、「総合教育政策」とか「地域学校協働活動」とかという、まさに「学校教育(行政)」と「社会教育(行政)」の「総合化あるいは協働」が求められているわけであるが、そのことは、この「生涯教育(学習)」の理念、すなわち「統合 integration」の考え方を求めているということでもあるのである！

とは言え、一方で残念なのは、そうした動きや取り組みには、ここで私が言っている「生涯教育(学習)」の理念、すなわち「統合 integration」の理念が、直接には意識されていない?主張されていない?ということである?!ここでは、そのことを詳しく展開することは出来ないが、繰り返すように、「総合教育政策」とか「地域学校協働活動」は、総体としてみれば、まさに「ヨコの統合(空間的統合→各種関係機関・団体等の横の連携・協力→ネットワーク化やプラットフォーム化)」を目指すもの(必要とするもの)であり、その経時的成果(評価の観点)は、「タテの統合(時間的統合→学校段階あるいは各年代の出会い・学習→個々の「生涯に亘る」学習の蓄積)」につながるものなのである(ある意味、「タテの統合」が目的で、「ヨコの統合」が方法ということも出来る?!)！

ということは、そこには、何か特別な枠組みとか範囲は必要ではなく、極端に言えば、その時々での学習、あるいはどこでの学習であっても(まさに学校での学習であっても!)、すべて「ヨコの統合」と「タテの統合」に関わっているということである！そして、そこで大事なものは、そのことに対する、支援する側(学校の教師も然り!)の気づきであり、それぞれの要素(「ヨコの統合」と「タテの統合」)に対する目配りなのである！言い換えれば、その学習を、如何にしたら、さらに有効なものに出来るか?あるいは、如何にしたら、その学習の動機付けや成果を、さらに意味のあるものにする事が出来るか?ということが求められているのであり、それが、まさに「生涯教育(論)」の真髄なのであるのである！

もちろん、こうした指摘は、現実の教育/学習システムの隘路や限界、そして何より、現前(近い将来も含めて!)の多くの由々しき問題・課題への対応の必要性というところから出てきたものではあるが、教育/学習のシステム、あるいはプログラム(当然学校教育のカリキュラムも含めて!)の問題としては、まさにそういう要素が内在していたのである！したがって、最後になるが、改めて「生涯教育学(学会)」としては、上述のような問題/課題意識(大小問わず!)を共有しながら、それが、今どうあるのか(歴史も含めて→事実の究明と検証)、そして、今後どのようなことを解決していけばよいか(未来予測?)?そのことを、まさに一つの「学」として共有し、内外に示していくことが必要なのである?!そして、そのことが、他の学会にはない存在意義/ウリ?として認められるのである(ただし、それは、いわゆる「学際的」なアプローチを排除するものでは決してない!)?!